

九州アメリカ文学会第67回大会プログラム

期 日：2022年5月14日（土）

アドレス：メールにて通知

開会式

10:00-10:10 高橋 勤（九州大学）

開会の挨拶

10:10-10:20 永川 とも子（九州大学）

総会報告

研究発表

10:30-11:10 森田 司（九州大学・院）

司会：内田 水生（西南学院大学・非）

「父との和解—晩年作品から再考するヘミングウェイと父親」

11:20-12:00 松下 紗耶（鹿児島女子短期大学助教）

司会：竹内 勝徳（鹿児島大学）

「黒人・女性・姉妹愛—*Plum Bun*における女性の連帯」

シンポジウム

13:30-15:30

「アメリカ文学と民族性」

司会・講師 長岡 真吾（福岡女子大学）

講師 大島 由起子（福岡大学）

講師 永尾 悟（熊本大学）

講師 渡邊 真理香（北九州市立大学）

特別講演

16:00-17:00

諏訪部 浩一（東京大学准教授）

「「薄れゆく境界線」をめぐって」

司会 高橋 勤

閉会式

17:05-17:15 竹内 勝徳

父との和解—晩年作品から再考するヘミングウェイと父親

森田 司 (九州大学・院)

1928年の父親の自殺は Hemingway の人生に大きな影を落とし、父と子のモチーフは愛憎伴う様々な形で作品に登場することとなる。例えば、1933年の“Fathers and Sons”では、ニックが父親と和解したと解釈されているものの、その後1940年に出版された *For Whom the Bell Tolls* において、ロバートは自殺した父親を臆病と断じて軽蔑する。

Hemingway の死後に出版された作品に目を向けても、1952年に執筆された“The Last Good Country”において、父親は不在ながらもニックを宗教的、道徳的に束縛し続ける存在として描かれている。そのため、ニックは父親に反逆し、作者は父親を批判していると解釈されてきた。しかしながら、伝記的事実と照らし合わせると一概に父親への非難が示されているとは言い切れず、寧ろ同時期に書かれていたテーマの結びつきが非常に強い作品に目を向けると父親との和解が描かれているのである。*The Islands in the Stream* と *The Garden of Eden* では、マカジキ釣りや象狩の際に父の理想追求の結果として息子は肉体的、あるいは精神的に傷つくことになる。特筆すべきは、それぞれで親と子のどちらかの視点から描写されていることであり、父親の失敗は非難ではなく共感として受け取ることが可能な点である。さらに前者の執筆を断念した後、Hemingway は後者に注力することになるが、この作品では物語が進むにつれてデイヴィッドは亡き父への理解を深めていくのである。

父親にアンビバレントな感情を抱き、作品での父と子のあり方は常に揺らぎ続けていたが、Hemingway は父との和解に向かっていたと本論では指摘する。

Ernest Hemingway, Clarence Edmond Hemingway, Posthumous Works

黒人・女性・姉妹愛—*Plum Bun*における女性の連帯

松下 紗耶 (鹿児島女子短期大学助教)

ハーレム・ルネサンス期に活躍した女性作家である Jessie Redmon Fauset は、雑誌 *The Crisis* の編集者として W.E.B Du Bois を補佐していたことで知られる。一方、Fauset の作品は、黒人中産階級が多く描かれるといった点や、おとぎ話をモチーフにしたそのロマンチックな作風などにより、長い間「保守派」に分類されていた。彼女の代表作である *Plum Bun* では、人種をパスする黒人女性である Angela Mary が、黒人という軛から抜け出し自由を得るために、ニューヨークへ移住し、白人男性との結婚を夢想する。この物語は一見すると、よくあるセンチメンタルロマンスとして読まれがちであったが、1980年代にフェミニスト批評家たちによる文学作品の読み直しが起こると、*Plum Bun* も再評価の対象となっている。

本作はラブロマンス的側面が強い一方で、風呂本淳子は「主人公がいわゆるシンデレラ・コンプレックスを克服し、自分の仕事に意欲をもち始めるのみならず、偽りのアイデンティティを自ら脱ぎ捨てて黒人意識に回帰してゆく「成長物語」に仕立てている」と評する。また注目すべきは、Angela の成長には多くの女性関わっているということである。例えば、妹の Virginia を拒否したこと、つまり黒人と、自らの黒人性をも拒否したことや、黒人女性である Miss Powell を庇い自ら黒人であることを告白した出来事は、本作の印象的な場面である。また、さまざまな人種・階級・性の在り方を包括するニューヨークにおいてこそ出会った白人女性たちとの交流も Angela には大きな影響を与えるのだ。黒人女性としてのアイデンティティの獲得と自立のみならず、Angela が人種をパスしたからこそ出会った白人女性たち、また、黒人女性としてのアイデンティティに回帰する契機となった黒人女性たちとの連帯にも、フェミニズム的再評価の価値があると思われる。本発表では、白人中心的／男性主義的／規範的異性愛という抑圧の中にある女性同士の交流を通して、規範の中に起こる混乱や批判的視線を読み解いていく。

キーワード

Jessie Redmon Fauset, Plum Bun, race, gender, Harlem Renaissance, New York, solidarity, sisterhood

アメリカ文学と民族性

米国初の黒人大統領と言われるバラク・オバマ（任期 2009-2017）から「米国初の白人大統領」とタナハシ・コーツが呼ぶドナルド・トランプ（任期 2017-2021）にかけての 12 年間に、米国の人種／民族的分断と対立は社会・政治・歴史など幅広い領域であらためて表面化した。ジャーナリズム・芸術・文化領域においても人種／民族をめぐる活発な報道と作品発表は続いており、民族性（エスニシティ）は米国のみならず世界的に重要な関心事となっている。そうした流れを背景に、本シンポジウムではアメリカ文学領域において民族性および関連する特性が創作活動においてどのような様相として現れ、いかなる問題を焦点化しているかを、アメリカ先住民（大島由起子）、アフリカ系アメリカ（永尾悟）、日系アメリカ（渡邊真理香：招待パネリスト）のそれぞれの具体例から考察する。また、米国における民族・人種表象について、歴史的経緯を整理しつつその特徴を俯瞰する（長岡真吾）。（敬称略）

アメリカ合衆国における民族文学

長岡 真吾（福岡女子大学）

アメリカ文学と民族性を考える際に「民族」と「人種」の対照から始める。現代的な意味での民族性は特に 1980 年代後半から 2000 年代にかけて社会・文化の様々な局面で再考され、アイデンティティや帰属意識の根拠になってきた特性である。またそれは「アメリカ人」としての包括的で同質性に基づくアイデンティティとは一定の緊張関係にある。それにたいして人種は、歴史的に「白人」ヨーロッパ系アメリカが自らを差異化するために必要とされてきた概念といえ、いわば白人的視線が生み出してきた差異である。この対照からアメリカ文学史を俯瞰してみると、ある意味でアメリカ文学は「人種」を無意識のうちに周縁化／他者的する自己定義から始まりながら、徐々に「民族文学」が可視化され中心化されていく経緯を辿ってきたという見方も可能になる。アメリカ民族文学に関するいくつかの先行研究を整理しつつ、その歴史的特色の一端を明らかにしたい。

『リザベーション・ブルース』における白人から先住民への「謝罪」の曖昧さ

大島 由起子（福岡大学）

北米先住民作家の Sherman Alexie は、長編小説第 1 作 *Reservation Blues*（1995 年）において 19 世紀に対先住民戦争で業績を残した軍人の亡霊をレコード会社のスカウトの姿で登場させる。ジョージ・ライトというその実在の軍人は、作者アレクシーと彼の部族スポークマン族にとって、今もって憎悪の対象といえる。

作中でライトは、主人公である先住民音楽バンド、コヨーテ・スプリングスに対して罪悪感を告白をする。だが、曖昧表現ゆえに相手には伝わらず、ゆえに物語が謝罪の主題に収斂していくことはない。本発表では、『リザベーション・ブルース』に描かれるレコード業界がニューエイジなる文化収奪に形を変えて先住民からの収奪を続けていることを確認しつつ、これまで等閑視されてきたライトの罪悪感と謝罪の曖昧性に焦点を当てることで、作家アレクシーが抱える本質的矛盾に迫りたい。そして、アレクシーが赦しの主題を扱いながらも、赦しという封印を解けなかった点について考え、歴史と創作の交錯の意義について論じる。

ホワイト・エスニックの「黒さ」—James Baldwin が描くイタリア人存在

永尾 悟（熊本大学）

James Baldwin 作品にはイタリア系の登場人物が描かれることがある。このことを、イタリア人存在の表象にまつわるアフリカ系アメリカ文学の系譜として考えられるだろうか。20 世紀前半の黒人作家たち

は、南部黒人と同時期に北部都市に流入したイタリア系移民が黒人扱いされがちであることに意識的であった。たとえば、Richard Bruce Nugent の小説では、エリートの黒人主人公が、「自分より色黒な」イタリア系男性と出会い、人種とセクシュアリティをめぐる自己認識に至る場面がある。Baldwin の *Giovanni's Room* (1956) は、イタリア系の「黒さ」の表象を受け継ぎ、そこからアメリカ的「白さ」とは何かという問いにつなげる。この物語は、南イタリア出身の Giovanni との関係を「汚れた」ものと考え、^{ヘテロノーマティブ} アングロサクソン系アメリカ人 David の罪悪感を描き、異性愛規範的な白人性の構築性を暴く。本発表では、アフリカ系アメリカ文学の伝統をたどりつつ、人種、民族、セクシュアリティの交差の中でイタリア人存在を位置付ける Baldwin の想像力を考察する。

抑圧を映す鏡—Nina Revoyr 作品におけるアジア系セクシュアル・マイノリティとアフリカ系の関係

渡邊 真理香 (北九州市立大学)

日本人とポーランド系アメリカ人の間に生まれた作家 Nina Revoyr の小説の多くにはアフリカ系アメリカ人が登場する。デビュー作 *The Necessary Hunger*(1997)や代表作 *Southland*(2003)、*Wingshooters*(2011)では、アフリカ系の登場人物をめぐる人種差別を通して、日系アメリカ人である主人公が人種差別問題に目覚めたり、自身がおかれている構造的差別の状況を捉えたりする。言い換えれば、Revoyr が描く人種差別問題はアフリカ系の人々へのそれを軸としたものなのである。注目したいのは、これらの作品の主人公たちはいずれもセクシュアル・マイノリティであるということだ。本発表では Revoyr 作品を全体的に概観し、日系ひいてはアジア系という民族・人種に基づくコミュニティで周縁化されてきたアジア系セクシュアル・マイノリティにとって、アフリカ系アメリカ人の存在はどのような意味を持つのか検討してみたい。アフリカ系女性を主人公に据えた *Lost Canyon*(2015)にまで論を展開できれば幸いである。

「薄れゆく境界線」をめぐる

東京大学 諏訪部浩一

2年ほど前から『群像』で「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪」という連載を持たせていただいているが、私はその初回の冒頭で「本連載の目的は、アメリカの現代小説に関する見取り図を、茫漠としたものであっても描いてみることである」と書いた。モダニズム期の小説を専門領域としている私にとって、「現代小説」のイメージは、かなり「茫漠」としたものであったからである。第2次世界大戦後にユダヤ系と黒人の作家達が台頭し、1960年代にはビート派が出てきて、70年代にはポストモダニストが活躍、80年代にはミニマリズムが流行し、その後半からはさまざまなマイノリティ作家が注目を浴びようになる……という大雑把な認識があったくらいであるし、ましてや90年代以降になると、何だかよくわからないという印象が強かったのだ。

これはもちろん、かなりの程度、私個人の不勉強によるのだろう。だが、自己弁護になってしまうかもしれないが、この「不勉強」には構造的な問題もあるように思う。私が大学に入学したのは1990年だが、「それまで」のものについては学部時代に広く(浅く)読んだとしても、大学院に進学して「専門領域」を持つようになった結果、「専門外」のものにだんだん手が伸びなくなっていった、ということだ。アメリカの「現代小説」は翻訳だけでも毎年20冊ほどが刊行されているようだが、それはすなわち、5年読まなければ100冊、10年読まなければ200冊というように、あっという間に「知らない本」が増えてしまうということである(翻訳されていない小説が無数にあることはいまでもない)。これは中高年の研究者にとっては、いかにも意気阻喪させる事実ではないだろうか。

しかし「現代小説」について連載することになった以上、意気阻喪してばかりではいけない——ということで、この2年間はなるべく多くの現代小説を読んできた。もともと、2年程度のにわか勉強では、現代小説の「見取り図」はやはり「茫漠」としたものにならざるを得ないというのが、連載の終盤を迎えての正直な気持ちなのだが、いまではその「茫漠」なところを積極的に評価したいとも思っている。だとすれば、モダニズム期の小説を読んできたあとで現代小説について考えてみたからこそ得られたものもあったのではないかと思います。

そうして「得られたもの」をうまく整理できるかどうかはまことに心許ないが、上で触れた「構造的な問題」も含め、この2年ほどの期間に考えてきたことについてざっくばらんにお話しさせていただき、少しでも多くの方が現代アメリカ小説を「探訪」してみようという気になっていただければ幸いです。